

文部科学省サイエンスカフェ：『禁煙の科学「脱タバコ社会実現への正念場」』要旨

平成22年5月28日：文部科学省情報ひろばラウンジ

瀬戸皖一氏が、JICAの支援で行ったスリランカにおけるビンロウジ噛みと喫煙に誘発される悲惨な口腔ガンの実態調査を、当地における長年の禁煙運動の結果、発ガン率を著しく減少せしめる事に成功したという嬉しい経年調査結果を含めて簡略に説明した。口腔ガンの悲惨な症例、その手術による治療、手術法の現地定着への努力も話題に上った。続いて菅野恵氏が、喫煙によって、心筋梗塞、脳梗塞、大動脈瘤、大動脈解離等の循環器系、血管系の疾患がいかに高率に誘発されるかを、自分の経験した症例に基づいて、数値と生々しい症例で説明した。氏が強調したのは、喫煙の影響を肺ガンにのみ繋げる議論の危うさである。肺ガンの場合、喫煙以外の要素が関与する余地が多いことから、その事をもってする喫煙寛容論に止めを刺すものであり、肺ガンよりも循環器系、血管系疾患の方が喫煙の害がより直接的に出るという否定し難い事実の提示であった。しかも、その悪影響が、受動喫煙者においても明らかにみられることから、喫煙者がよく言う、自分の嗜好の問題、自己責任の問題、という理論が社会的に成り立たない事を示した。喫煙によって誘発されるこれらの循環器系疾患の治療に要する膨大な医療費負担についても触れ、問題が喫煙者のみで収束するものでないことがのべられた。続いて、糖尿病における喫煙の悪影響についても数値をもって説明された。ここにおいても、肺ガンより濃厚な関連が示され、喫煙、および受動喫煙の恐ろしさを実感させられた。ここで、瀬戸氏の、疫学という研究手法の合理性、有効性についての補足説明があった。引き続き、瀬戸氏が、神奈川県における官民一体となった受動喫煙防止の動きについて説明した。その中で、瀬戸氏は、禁煙というより、例えば20歳から始めた喫煙の習慣から卒業するという意味で「卒煙」という言葉が良いと提言した。脱タバコ社会の実現には、禁煙、嫌煙で愛煙家とヒステリックな衝突を繰り返すのは得策でなく、愛情をもって卒煙していただく「愛情卒煙」が良いとの事であった。日本学術会議が最近発信してきた、「要望：脱タバコ社会の実現に向けて」（2008年3月）、「提言：受動喫煙防止の推進について」（2010年4月）の取りまとめ役（副委員長）を務めてきた瀬戸氏の総括的な話に続いて、参加者から、自分の巻き込まれた喫煙者、禁煙者間のトラブルのリアルな実例説明があり、禁煙問題の根の深さを実感させられた。コロンブスによって欧州にもたらされ、主として英国で発展し世界に広がった喫煙の習慣も、WHOをはじめ世界的な喫煙の動きの中で、既に日本もその仲間入りを約束しており、待ったなしの禁煙対策が必要な時期に来ている。今回、心筋梗塞などの恐ろしい臨床現場の写真を目の当たりにして、改めて喫煙、受動喫煙の怖さを実感させられた90分間であった。